

---

# また会えたら

白兎

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

また会えたら

### 【Nコード】

N8200E

### 【作者名】

白兔

### 【あらすじ】

気持ちを伝える＝言葉にする。それってとても難しい。

## 第1話

「来て正解だったかな？」

その一言から恋は始まっていたのかもしれない・・・。

9月上旬。

文化祭のシーズンがやってきた。3年生の相羽葉子にとっては最後の文化祭。

受験を一般入試でしようと考えている葉子は、文化祭の係りは出来るだけ辞退しようとしていた。

「葉子！お願い！一緒に係の仕事やって！！お願いお願い！1人でなんて嫌だ。絶対に知らない人ばかりだよ！！！」

友人の飯田美紀が懇願してきた。

美紀とは2年生の時に知り合い、今では親友である。

葉子は1年生の頃から勉学に熱心で、学年1位を常に保ち続けていた。

そのためか、友人をつくる事を忘れていた。

それに気づくのに1年かかるとは、鈍感というか何というか。

もともと人見知りであった事も関係しているのかもしれない。

まずいと思った葉子は、なんとか話しかけ、やっと美紀という友人ができた。

それからというものの、充実した毎日を送っている。

「えっと・・・今年は・・・ちょっと」

推薦で決まる人が多い中、葉子は一般入試で行こうと思っていた。もちろん美紀もその1人。

でも、なかなか係りが決まらないため先生がじゃんけんで負けた人

と宣言した。

そして最後に残った美紀が係りに指名されたのだ。

実は美紀がこう言うのも3回目。

それを断り続けた葉子も葉子だが、言い続けた美紀もなかなかのものである。

「お願い！！他クラスは2人なんだって！なのにA組だけ1人つてないよー！」

美紀の言い分も分からないわけではなかった。ただ正直、面倒だったのだ。

美紀がなろうとしている係りは毎日遅くまで残り、巨大な看板を創作しなければならぬのだ。

葉子が逃れたがるのも無理はない。誰だって嫌なのだ。

「うーん・・・分かったよ」

「本当！？ありがとう！じゃあ一緒に頑張ろうね！」

「・・・うん」

葉子はとうとう折れた。親友の頼みをこれ以上断るわけにもいかなかったのだ。

美紀には色々と助けられている。それに勉強は自分だけの問題ではない。美紀だって同じ。

高校最後の思い出づくり。そう考えることにした。

数日後。

「葉子、放課後集まりだって」

「うん、分かった・・・」

美紀が去った後、葉子のため息をついた。

割り切ったつもりだったが、これから1か月間、勉強が思うように出来ない事が不安だったのだ。

放課後になり、教室移動した。

下級生はもう大体集まっていた。

葉子と美紀は適当な位置に座った。

「今日はすぐに終わるかもね」

「うん。そうだといいな」

そんな会話をし続けていると、先生が入ってきた。

「全員いるな。それでは始める。まず、男女で分かれて作業するんだが」

説明は短かった。男子は木材の切断・組み立てなどの力仕事。女子はイラストが担当らしい。

美紀はノコギリを使いたかったらしく、項垂れている。

「じゃあ男女各リーダーが決まったら解散していいぞ」

そう言うと、先生は教室を出てしまった。右端の方で、他クラスの男子が叫んだ。

「で、誰がなんの？」

「ここは1人しかないでしよう！」

「やっぱ？そうだよな。3年間もこの係りをしてるもん」

3年男子の視線が1人の少年に集まった。

「・・・え、俺？」

「他に誰がいるんだよ」

「ちょ・・・待つて」

「待たない。はい、男子筆頭決定!!」

周りから拍手が起こった。無論男子だけだが。指名された当人は俯いている。

葉子は女子は誰がなるのだろうと思っていた。

皆からやりたくないオーラが出ているのが見なくても分かる。勿論、隣の美紀からも感じとれる。

「しょうがない！あたしがやる！」

突然1人が手を挙げ、宣言した。

「いつまでも決まりそうにないし、早く帰りたい。って事で、みんな宜しく」

名前も知らぬその人は、帰ってしまった。葉子は啞然としていた。ああいう人もいるのだと。

少し尊敬までしてしまった。

「決まって良かったね」

と、美紀が小声で呟くと葉子は頷いた。

翌日から作業が始まった。

描くデザインを持ち寄り、話し合った結果、葉子のデザインに決まった。

自信がなかった葉子が、選ばれて嬉しかった。

「それじゃ解散。男子の方が終わらないと、あたし達は動けないから」

D組の小西彩夏はてきぱきとリーダーの役目をこなした。彼女がリーダーになって正解だったと葉子は思った。

「ねー葉子。たまには寄り道して帰らない？」

今日、美紀は予備校が無いらしい。予備校へ通っていない葉子は家に帰る以外、特にする事がない。

それに久しぶりの寄り道。断らないはずがない。

「いいね！ついでに夕食もとうろく」

「やった！デートだ」

葉子と美紀は駅へと向かった

次の日は生憎の雨。

葉子は体育の時の忘れ物を取りに、体育館へ向かっていた。

放課後は部活で利用されてしまったため、足を速める。

すると、体育館へ繋がるホールで男子が作業をしていた。湿気が強いせいか、汗をかきながら働いている。

「もしかして体育館に行くの？」

1人に声をかけられた。その人物はリーダーになった者だった。  
「え・・・う、うん」

普段、全く男子と話さない葉子は動揺してしまった。

「そっか。待ってて。今、少しどけるから」

すると、重そうな木材を軽々と持ち上げ、道を作った。よくみると、周囲は木材で埋め尽くされており、足の踏み場がなかったようだ。

「はい、どうぞ」

「あ、ありが・・・とう」

ぎこちなく礼を言い、走ってその場を後にした。

「緊張した・・・」

手で胸を抑え、自分を落ち着かせた。

（優しい人もいるんだ・・・）

校則は厳しいが、最近は身なりが崩れている人が多いため、葉子には新鮮に感じた。

翌日。

「ジメジメする～。暑～い」

放課後、体操服に着替えた美紀が腕に水をかけていた。

葉子は眉間にしわを寄せながら、ブラウスを引っ張る。昨日の雨のせいで湿気が残っているのか、肌にくっつくのだ。

足早にビニールシートが牽いてある日陰へ向かった。

「やつほ～。今日は下書きだけで終わるかも」

（あ、小西さんだ）

美紀と同じく体操服を着ている。

「あれ？相羽さん、体操服は？」

「えっと・・・忘れちゃって。でもペンキは使わないんだよね？」

「うん。使わない」

「今年でこの制服も終わりだから、汚れてもいいかなって・・・」

「相羽さんがいいなら問題ないよ」

「ありがとう」

早速作業にとりかかった。少し動いただけで汗が滲み出てくる。

「あゝー！湿気！どこか行け！」

小西さんが髪を束ね始めた。

「うるさいんですけど」

声の方を向くと、男子のリーダーがいた。

「ホントの事でしょ」

「みんな同じ事思ってるんです。我慢して下さい」

小西さんは頬を膨らませた。

「若<sup>わか</sup>さくん！終わった！」

「おー。今行く」

『若』は呼ばれ、行ってしまった。

「ねえ、ちよつと」

「・・・え？どうしたの美紀？」

「来て来て！」

葉子は訳も分からずニヤニヤしている美紀の後に続いた。

「絶対好きだよ」

「何を？」

「小西さんだよ。絶対に若月君の事、好きだよ」

そこで葉子はリーダーの名前が若月である事を知った。

「美紀って凄いね。そんな事が分かるなんて」

美紀は呆れた顔をした。

「見れば分かるよ！声が違うもん」

葉子は彼女の声を思い出してみた。だが、変化が分からなかった。

「リーダーを引き受けたのもそのためか・・・」

美紀は顎に手を当てている。

「・・・美紀？」

「戻ろっ。確かめなくちゃ」

葉子の手を引き、走った。



「見てよ。2人で話してる」

「きつとこれからの進め方を話し合っているんだよ」

「あーあ・・・あんたってさあ・・・」

確かに美紀が言うとおり、小林さんは楽しそうに話している。

前に同じクラスだったと聞いていたため、疑問に思わなかった。

「じゃあ今日は片付けよう。明日、男子は女子のサポートに入っ

て」「はい」

それぞれ、各教室へ戻った。

「お腹空いた・・・。食べて帰る」

「うん。そういえば、マックに新しい商品入ったよね」

「そうだった！早く行こ！」

急に元気になった美紀に遅れまいと、葉子は走った。

「あゝ、幸せ。いつもの倍、美味しく感じる」

葉子と美紀はマックで夕食をとっていた。かなりの空腹だったのか、2人共ポテトを2つずつ頼んだ。

「生き返る・・・」

「食べるって幸せだね・・・」

「お前ら何言ってるの？」

頭上から声がした。見るとクラスメイトが立っていた。髪を立たせている。校内以外は校則無視の構えらしい。

そして隣にいたのは若月だった。

「げ！佐々木・・・食欲失せた」

「失礼だな。・・・ってなんでポテトが4つもあるんだよ！食い過ぎだろ！」

「お腹空いてるの。あっち行つて。ね、葉子？」

葉子は苦笑いをした。

「若さん見ろよ。これ全部食ったら太るよな」

「2人とも痩せてるから大丈夫だよ」

「・・・若さんって、さらっとそういう事言うよね」

「そう?・・・あ、あそこ空いた。ほら、座ろう」

若月と佐々木は外が見えるカウンターの方へ向かった。

「なんで佐々木がいるんだ・・・」

「よく来るのかな?」

「たまにだと思う。あの2人、チャリ通だし」

「そうなんだ・・・。でも学校まで大変そう」

「家まで25分くらいかかるみたい。でも運動系の部活に入ってたから平気じゃない?」

「そうだね」

葉子と美紀は食べ終わり、プレートを片付けた。

葉子は若月達に挨拶をしようとしたが、話しているようなので諦めた。

「あゝ、春来ないかな・・・」

電車の中、美紀が広告を眺めながら言った。

「春は暖かいもんね」

「そっちの春じゃない。恋です」

「あ、ごめん」

「誰でも良いって訳じゃないけど・・・なんか安心出来る場所が欲しい」

「家ではなく?」

「それ以外で」

「そうだ!手、見せて」

「手?」

「左手出して」

美紀は言われるがまま、左手を出した。手を取ると葉子は側面を見た。

「何か分かるの?」

「うん。今、結婚線を見てるの」

「そんな線あるの!?!」

「この線だけは生まれてから一生変わる事がないんだよ」

「へえ」。葉子、凄い！」

「本を少し読んだだけだから、あまり当てにならないかも」

「いや、葉子だから大丈夫だよ。うん。信憑性がある」

「あはは！ありがとう。・・・美紀は今かな？」

葉子は、じつと手を見ながら言った。

「今と・・・25歳・・・かな？」

「え！出会いが？」

葉子は頷いた。

「今も良いけれど、25歳の方がもつといいかも」

「・・・」

「美紀？」

「・・・分かった。今もいいんだよね？」

「う、うん」

美紀は何か考えているようだった。

葉子は誰か気になる人でもいるのだろうと、敢えて聞かなかった。

「葉子、ありがとう」

「どういたしまして」

電車が止まった。駅に到着したらしい。

葉子は美紀に別れを言い、ホームへ降りた。

「私は・・・まだ」

掌を見ながら葉子は呟いた。

数日経ち、文化祭の看板は半分まで終わった。このままの調子でいけば、間に合う様だ。

若月曰く、去年は手の込んだ看板で、ギリギリまで残ったそうだが、今日、美紀は放課後残れないので、葉子1人で作業場に向かった。早く来すぎたのか、誰もいなかった。

（道具とか出しておいた方がいいよね）

少し離れた場所に板やビニールシートなどが置いてある。葉子は先に道具を持って行き、次にシートを敷いた。風が少し強かったので飛ばされないよう工夫する。

最後に板を運ぶ事にした。

薄い量があるため、少しずつ持っていた。風があるため、バランスをとりずらく大変だった。

（やっと残り4枚・・・）

持ち上げたが、疲労も溜まっていたため、すぐに降ろしてしまった。

（握力が・・・）

葉子は少し休み、また持ち上げてみた。

（あ、今度は大丈夫かも）

歩いていると、若月がいた。

「あ・・・持つよ」

葉子は嬉しかったが、若月の手には提出物であろうノートが何冊もあった。

「大丈夫・・・だから。それ、提出・・・しなくちゃ・・・いけないでしょ？」

若月は思い出した様な顔をした。

「ご、ごめん」

若月は走って行ってしまった。

葉子は風が吹かない内に運ぼうと急いだ。だが、願いも虚しく強い風が吹いた。

（どうしよう！力が・・・）

葉子が倒れてしまうのを覚悟した時、誰かに支えられた。

「・・・来て正解だったかな？」

見上げると、そこには若月がいた。

「え！・・・どうして？職員室に・・・行っただんじゃ・・・」

「ああ、丁度いい人が歩いてたから渡した」

「・・・あ、ありがとう」

「う、うん」

その後、板は全て若月が運んだ。

葉子は若月がいなかったら、完全に怪我をしていたと思った。

「若さ〜ん!」

（あ、小林さんだ・・・）

「今日も手伝い宜しく〜」

「はいはい」

この時、葉子は胸が苦しくなった。

これが恋だと自覚しなかったが。

「ちょっと抜けるね」

そう言い、小林さんは何処かへ行ってしまった。

葉子は黙々と紺色を作った。塗る面積が多いのに作るのが困難な色だった。

最初は調節が難しかったが、次第に分量が分かってきた。

「隣いい?」

振り向くと若月だった。どこか疲れた顔をしていた。

「つ・・・疲れてるの?」

「え?・・・まあ色々」と

若月は筆を取り、塗り始めた。

「さつき・・・ごめんなさい」

「さつき?・・・板の事?」

葉子は頷いた。

「むしろそっちの方が疲れたんじゃない?シートだけにすれば良かったのに」

「み、みんなすぐに取り掛かれると・・・思ってた・・・」

若月は笑った。

「真面目だね。あの人にも言っただけだよ」

「だれ?」

「あれあれ」

指で指した方を向くと小西さんがいた。

先生と話している。どこか楽しそうだ。

「全く・・・相羽さんが頑張ってるのにね」

葉子は首を振った。

「小西さんはリーダーになって・・・くれたし・・・」

「・・・そっか。まあ相羽さんのお許しが出たから良しとしますか。

あ！ペンキ付いた！」

葉子と若月は見合い、笑った。

「そっいえば、この色はどうやって作ったの？」

「それは」

葉子は楽しかった。普段男子と全く話さないが、若月は違った。

何か違うのだ。雰囲気なのか、それとも言動なのか。

葉子は若月と話しながら、考えていた。

次の日、葉子はいつもとは違う気持ちで作業場に向かった。

（若月君・・・もう来てるかな？）

行ってみるとまだ誰もいなかったので、葉子は看板が置いてある場所へ移動した。

完成に近づいているため、色が鮮やかだった。

葉子はふと、若月が声をかけてくれた時の事を思い出した。期待をしているわけではないが、また2人で話したいと思った。

（何考えているんだろう・・・）

葉子は立て掛けてある看板を3枚ずつ運んだ。その後、シートを敷いて道具も出した。

その間、若月は現れなかった。

看板があつた倉庫の前に、長椅子が設置されている。葉子はそこで休む事にした。

足を伸ばし、背もたれに寄りかかり、目をつむった。そのまま寝てしまいたい気分だった。

「お休み中？」

不意に声がしたので、目を開けるとそこには若月がいた。

「あ……！今すぐ行くから」

葉子は立ち上がるうとしたが、若月に両肩を押され、元の位置に戻された。

「……え？」

「俺も休む」

言い終わると葉子の隣に座った。

「早く来たかったけど、余計なのに捕まってさ」

「余計な……の？」

「そう。相羽さんも知ってる人」

「誰？」

「言わない。その人に言う困るから」

若月は二ツと笑った。

葉子は頬が熱くなるのを感じた。

よく考えてみれば、若月が隣に座った時からそうだったかもしれない。

しばらく沈黙が流れた。

葉子は何か話そうと思ったが、話題が見つからなかった。

「あのさ」

若月が切り出した。

「俺、何も話さないの耐えられないんだけど」

「え……えっと、どうすれば……いい？」

「うん。じゃあ俺の質問に答えて」

「う、うん。わかった」

「普段、どんな曲を聞くの？」

「……ボサノバかな？」

「ボサノバか。あまり聞いたことないな」

「たまに喫茶店とかで流れてるよ」

「俺、喫茶店行かない」

若月は笑いながら言った。

「それじゃ・・・好きな色は？」

「緑と・・・白」

「あ！俺も好き。銀とか黒もいいな」

「男の子って、そういう色・・・好きだよね」

「そう言われればそうかも」

若月はとても優しい目をしていた。葉子は思わず見惚れてしまった。そんな自分が恥ずかしくなったのか、逃げ出したくなった。

「・・・そういえば、もうそろそろ行った方がいいよね」

葉子は立ち上がった。

すると、若月は少し眉間に皺を寄せた。

「相羽さんは全部運んだんでしょ？ちよつと遅れたって何も言われないって」

「でも・・・やっぱり『何してんの？』」

振り返ると腕を組んだ小西がいた。

「ご、ごめんね。今、行くから」

葉子は走り出した。

「あ・・・」

若月も立ち上がり、追いかけようとした。

しかし、腕を捕まれた。

「いけないで・・・」

（小林さんは若月君の事が好きだったんだ！それなのに私は・・・）

葉子は走りながら思った。

作業場に着くと、美紀がいた。

「あ、葉子。どこ行ってたの？」

「えつと・・・」

葉子が答えを導き出せずにいると、美紀が肩を優しく叩いた。

「正直に答えなくていいよ。これ全部運んだの葉子なんでしょ？」

「そうだけど・・・」



「ごめんね。私も一緒に行ければ良かったのに」

「そんな事ないよ！それより、どこ塗ればいいかな？」

「じゃあ・・・この鉛筆で書いた通りをお願いしまーす」

「うん！」

葉子は若月と小西が来ない事が気になったが、今は集中しようと考えた。

あれから数日経ち、文化祭前日になった。

登校してすぐに準備に取り掛かった。

「今日は午前中で終わりだね」

「うん。それに明日から文化祭だし、最高！」

美紀と葉子はワクワクしていた。

今まで頑張って作った看板も完成し、設置するだけとなった。

若月が脚立を運んできた。

「若さん、これ長くない？」

男子の1人が尋ねた。

「これくらいないと届かないみたい」

「誰が乗るの？」

皆が若月を見た。

「ここは若さんでしょ」

「うん、若さん高い所似合うよ」

「若さんカッコイイ」

「最後、棒読みだったぞ！」

しょうがないなと言いながら、若月は皆の希望通り脚立に登った。

「この位置でいい？」

「OK！いいよ」

葉子達は看板を見上げた。

チェス盤の様なデザイン。シンプルだが、存在感があった。

「よし、解散。みんな帰って明日のために休んでおけ」  
「……はい」

皆が散っていく中で、葉子だけはまだ看板を見つめていた。  
(もしこの係りになっていなかったら……)

「葉子！何してんの？」

美紀はもう先に行ってしまうていた。

「ごめん、すぐ行く！」

葉子は看板を背に走り出した。

文化祭は無事に終わった。

準備にあれだけかかった看板も取り外された。

(これからは受験モードか……。頑張らなきゃ)

葉子は釘を外しながら、これからの事を考えた。2月までが勝負。  
その後は卒業するだけ。

高校生活は早く感じた。入学したばかりは不安で一杯で、次の日が来る事が怖かった。

だが、美紀と出会い、葉子は変わった。少し社交的になったのだ。  
これは葉子にとって大きな進歩であった。

放課後。

自習室へ向かった。

学校側が生徒のために設置してくれたのだ。ノートに記帳すればいつでも利用できる。

葉子の様に予備校へ行かない者にとって、有り難かった。

葉子は自習室に鞆を置き、名前を記帳しに進路室へ向かった。

「失礼します。……あ」

中に入ると、若月が友人と話していた。

(ど、どうしよう)

文化祭の係りで知り合っただけ。しかも、そんなに話していない。今、会ったところで何も起きないだろう。

葉子はもう話せないと思うと辛かった。だが、どうして辛いのかよく分からなかった。

カードを提出するのも忘れ、次の行動を考えていると、会話が終わったのか、友人が進路室から出ていった。

そして、若月と目があつた。

## 第2話

「葉子！冬休みどうする？」

「どうもこうも・・・巣籠もりだよ」

「ですよー」

溜め息をつく、美紀は席へ戻り、帰り支度を始めた。今日で2学期は終わり。

人生で2度目の辛い冬休みが来る。

（あと数ヶ月で終わるんだから、頑張らなきゃ！）

葉子も支度をし、美紀に別れを告げ、自習室へ向かう。

窓の外は雪が降りそうな程に寒そうだった。膝を出して歩いている場合ではないくらいだ。

自習室の前まで来ると、鍵がかかっていることに気づいた。

HRが終わって間もないので、まだ先生が開けに来ていないのだろう。

葉子は仕方なく職員室へ足を向けた。

（そういえば終業式の日に残る人なんているのかな？もしかして今日は貸し切り・・・だったりして）

少し胸をワクワクさせながら階段を降りようとすると、登ってくる佐々木と目があつた。

葉子は思わず目を反らしてしまった。何年も続いている嫌な癖。

（何度目だと思ってるの！いい加減に直さなきゃ！）

佐々木がどんな顔でいるのか恐る恐る見てみると、案の定、唇を尖らせていた。

「飯島からシャイだって聞いているけど・・・やっぱソレは良くないと思う」

その通りです、と言うしかなかった。佐々木は何も間違ったことを言っていない。

自分だって目をそらされたら傷つくに決まっている。

「ご、ごめん。本当に・・・いたっ！」

（ななな、何！？）

葉子は手刀を受けた。いや、くらった。半分本気かと思うくらい痛かった。

「さっき俺が受けたダメージ分」

そう言うのと彼は階段を一段抜かしで上がっていった。葉子はしばらく啞然としたまま階段にいた。

隣を何人の生徒が通ったかわからない程に。

「失礼します」

葉子は職員室へ入り、鍵の保管場所を見た。すると、あるはずの鍵がない。予想ははずれていたようだ。

退出しようとした時、担任教師に呼びとめられた。

「待て、相羽」

視線を送ると、笑みを浮かべている羽佐間がいた。

「ちよつといいか？」

「はい」

2人揃って廊下へ出た。

「佐々木？どうしたの？」

山本が先ほどから無表情の友人に声をかける。

「・・・別に」

「そう？・・・で、何があったの」

「・・・お前なあ」

佐々木が言葉を続けようとした時、勢い良くドアが開いた。ここが自習室だという配慮が全く感じられない。

「あれ？いない？ま、いつか」

その様なことを言っただかと思うと、また威勢よく閉まった。

「うわー、何あれ。日頃の生活レベルがわかりますなあ」

山本は机の仕切りで人物は見えなかったが、声で特定することがで

きた。

「な、佐々木くん」

「・・・」

「な！」

「・・・」

「聞いてんの・・・か！」

山本は思いっきり佐々木の椅子を蹴った。大きな音が響く。

「な・・・にすんだよ！ビビっただろうが！」

反射神経の良さで無様に倒れることはなかった佐々木だが、手で胸を押さえているところを見ると、相当驚いたようだ。

「あ、教科書忘れた。行ってくる」

しれつと言いつつ残して、山本は廊下へ出ていった。

「・・・はあ。マジわかんねえ」

自分以外になくなった教室。数秒前まで座っていた椅子が、手の届かないところまで転がっていた。

（めんどくさ・・・。あいつが戻ってきたらやらせるか）

佐々木はしばらく床に座っていることにした。

さすがに終業式だけあって、誰も来る気配がない。受験勉強する生徒は予備校の方へ行っているのだろう。

窓越しに景色を眺めると、もう雪が降っていた。

山本が出て約2分弱、扉が開く音がした。

（あいつ、歩くの早いからな）

佐々木は上半身だけだそうかと思ったが、隠れることにした。

この教室の机は予備校の自習室さながらの大きさなので、標準体型の佐々木は容易に潜り込めた。

足音が近づく。もう少して視界に入る。だが、

（・・・あ！？相羽じゃん！）

山本ではなかった。

（こんなの見られたらやばい！！）

急いで出ようとすると、頭を打った。何の音かと相羽が振り向く。

「え！？さ、佐々木くん！？なにを・・・」

「お・・・おう」

制服のホコリを払いながら、ヨロヨロと立つ。消しゴム落したんだと苦しい言い訳。

葉子は深読みをしなかったため、なんとか収まった。

「・・・あ、あの！」

「ん？」

完全に目が泳いでいる葉子。佐々木は先ほど起きた階段での出来事を思い出した。

きつとそのことを気にしているのだろう。

しかし、佐々木はもうどうでもよくなっていたので話をそらすことにした。

「さっきのこ『なにそれ？』」

葉子が佐々木が指さすモノを見た。勉強道具と共に持っていたお菓子の袋である。

「こ、これは羽佐間先生から貰ったの」

「へえー・・・ワイロ？口止め料か？先生の秘密知っちゃった感じ？」

「違うよ！それにあの先生に秘密なんてなさそうだよー！」

「・・・はは！！何言ってるの相羽さん！ウケる！！」

前倒れになりながら笑う佐々木。もはや膝までついている。

「もー、笑いすぎ！」

「だって！・・・だってさあゝ・・・あはは！！」

もうだめだと思つほどに佐々木は爆笑していた。

葉子は顔がだんだん赤くなるのがわかった。冷えた手を当てるも一向に収まりそうもない。扇いでみても同じだった。佐々木はというと目にうつすらと涙まで浮かべている。

「ここ自習室」

声と共に表れた少年は手にある日本史の教科書で佐々木の頭部を殴った。

「いつ・・・山本おお・・・」

殴られた当人は唇をかみしめている。本当に痛そうだ。

「相羽さん、来てたんだ」

「う、うん」

彼の手元を見る限り、教科書の角で殴ったことは明白だ。佐々木に視線を戻すとまだうずくまっている。

大丈夫なのだろうか。なにせ相手は「日本史の教科書」だ。

「それ、チョコ？しかもトリュフ？」

佐々木など目に入っていないかのように言葉を続ける。さらに山本は葉子から袋を取り上げ勝手に中を開けた。そしてパクリ。遠慮という言葉を知らないのか、2つ目も口にした。

「で、なんで佐々木は馬鹿みたいに笑ってたの？」

「羽佐間に秘密なんてなさそーだって言っただよ」

痛みが治まってきたのか、佐々木は立ち上がった。

「あー、確かにね。うん。秘密があっても顔でバレそう。それよりなんでチョコを貰ったかが気になる。あ、もう1個ちょうだい」

自由人、と佐々木と葉子は思った。

「頑張れっでことで貰ったの」

「へー、学年首位限定ギフトってわけか」

それをお前がむさぼっているけどなど、佐々木は心の中で呟いた。

その後、3人で貰ったチョコを食べあった。

案の定、終業式の日に自習室を利用する者はいなかったので、フリースペースと化していた。

佐々木は使用禁止の携帯をいじり、山本はチョコの香りに酔ったらしく、眉間にしわをよせている。

葉子はというと、息苦さを感じていた。

若月の友人2人と同じ空間に入ること戸惑っていた。早く勉強したいのだが、この状況を打破できずにいた。ただ「勉強するね」と言えはいだけなのだが、それができない。チラチラと2人を見る



も特に反応がない。

(・・・よし！)

意を決して立ち上がろうとすると、山本にスカートを掴まれた。

「山本、そのまま上に上げる。そしたらお前を犯罪者として写メるから」

「ちよつと！」

葉子は裾を引っ張るが、山本は放さない。むしろ見つめてくる。

「冬休み空いてる？」

「・・・え」

何を言い出すのだろうか、この男は。

「1日くらい、いいよね？」

「え・・・う、えーっと」

(山本、なに考えているんだ？)

佐々木は友人の行動が全く理解できなかった。そしてこの状況をどのように打破すればよいのかで悩んでいた。友人は女子のスカートを掴み、デート(?)の申し込みまでしている。

ここはとりあえず、からかってみることにした。

「おいおい山本。なにデートに誘ってんだよ」

「駄目？」

効果は皆無だった。だが佐々木は諦めない。次だ次。

「近い日がいいかな？23日はどう？」

「な、なにするんだよ？会って」

「お前に聞いてない」

「・・・はい」

(もう帰ろっかな)

佐々木はおずおずと立ち上がり、強行手段に出ることにした。

「放してやれっつての！！」

「む！」

言葉と同時に葉子の腕をひっぱる。反動で少女の身体が佐々木の胸に倒れこむ。

その瞬間、自習室のドアが開いた。

「・・・・・・・・」

現れた少年は黙って現状を見つめる。

女子のスカートを掴む友人1人。そしてその彼女を後ろから抱きしめている友人1人。

「よぉ・・・若・・・月（タイミング考えろ・・・）」

少年　若月は眉をひそめた。

「おまえら、何してんだよ」

氷点下の声とどこまでも暗い瞳。普段見られない若月がそこにいた。

お、来た来た。遅いな！。

あんな顔、見たことねー。これ、殺されるかな・・・あはは  
全く逆のことを思っていた山本と佐々木だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8200e/>

---

また会えたら

2011年2月10日02時09分発行